

渡小舟

梶浦玲良子句集

おほむらさき小便小僧の視線

引く鴨にすつくと海女の影法師

日帰りの予定でありし落椿

吊革に黄金週間おはりけり

春昼の待つとはなしに坂の上

蘆の芽に北斗の息のやはらかし

ばらに水塩ふりかけて茹で玉子

どのあたりから鍼打たうか春の山

春霜のむかしむかしの二人かな

逃げ水が喉につまりしポストかな

囀りのこぼれて木々のめまひかな

月の暈尾にかかぐるや恋の猫

ばば抜きへ蠅取蜘蛛の射程距離

軒に干すもののこまごま夏つばめ

夜へ傾ぐニセアカシアの花の階

花屋に灯てんたう虫の帰る空

キャンバスに八月の山ねむらせる

ゆく夏の路地を香車のかけ抜ける

かたつむり真つ直ぐ行けば本籍地

あとずさり掘り出すあそび七七日

へその緒のつづきに森のさがりごけ

飛魚に水平線のとぎれたる

蓮の花わつと空き瓶回収日

明日は征く兄のうしろを螢籠

抽出しの奥より虹をあぶり出す

サイフオンの水のはなやぎ眠草

馬鈴薯の花から潜水艦のひげ

煙突解体どうして入るラムネ玉

落雁のひとつは影か波小舟

鳴く虫のとぎれとぎれに行く峠

冬瓜のくるり文福茶釜かな

ふじごろも秋夕焼を脱ぎはじむ

木目込みに台風の目の反転す

生身魂いくたび脱皮くり返し

長男を「大和」へ還し父の盆

うす紅の雲となるまで秋つばめ

鯨幕たたみてそばの花盛り

豆稻架の影ふくいくと茶毘終る

なつめの実ばいと没り日を口の中

シュークリームはみでる星の流れけり

ひぐらしの峠の水をおつとつと

きのふより今日の寒さを嫁姑

なずな摘む遠きひとりは母に似て

にらめっこしてゐるうちに冬の山

干蒲団いつぽん川村とほる

天網の裏側裂けて竜の玉

ここだけの話ばかりの蜜柑かな

出初式村の鴉が位置につく

足跡のひとつ齡とる虎落笛

町おこし決まる二月のホツチキス

句集 波小舟

平成十四年五月三日発行

著者 梶浦玲良子

〒675-10031 加古川市加古川町北在家一八九-八

発行者 勢力海平

発行所 株式会社 天満書房

〒530-0043 大阪市北区天満二-六-三十一-一〇七
電話 ○六一六三五八一九〇七三

頒価 三、〇〇〇円
